

主 題：教会のあるべき姿 = 使命

聖書箇所：マタイの福音書 28章18－20節

テーマ：聖書の教える教会のあるべき姿とは？

私たちは先週から主に喜ばれる教会として私たちが成長し続けていくために、教会のあるべき姿とはそもそも一体どのようなものなのかをみことばから見始めました。今回は特にその土台に関して四つの特徴をマタイ16章からイエス様のことばを通して学びました。

まず教会のあるべき姿として一つ目に挙げられていたことは、教会はイエス・キリストが生ける神の御子であると信じる信仰告白の上に堅く建っているということでした。教会にとって何よりも大切なことは、どれだけの人数が集まっているか、どんな働きをしているかではなく、聖書が教えているキリストを愛し、いつもこのお方に信じ従おうとすることでした。それこそが真の教会のあるべき姿だったので。また二つ目に、教会というのは揺るがぬ建設者であるイエス・キリストの所有物だということも挙げられていました。教会というのは建物や場所を指しているのでも、教会のリーダーや私たち個人の所有物でもありませんでした。真の教会とはキリストをかしらとする、主によって召し出された者たちの集まりを表していました。神様が愛ゆえに犠牲を払って買い取られたご自身の体である教会、救われてこの体の一部とされた私たちは神の家族として互いの間で学んだみことばを喜んで実践していくことが求められていました。三つ目に挙げられていたのは、教会は揺るがぬ約束によって守られているということでした。教会は死に勝利されたキリストによって建て上げられて行く。だからこそどんな権威や権力、死の力でさえもその働きを妨げることはできませんでした。教会を打ち負かすことができるものはいっさい存在しないのです。そして私たちもこの主にあって同じく勝利者として生きていくことが可能になりました。だからこそ教会はたとえどんな戦いや迫害を経験することがあったとしても、自分たちの思いや考えに流されて妥協するのではなく、みことばに堅く立って忠実に福音を伝え続けていくことが求められていたのです。そして最後四つ目に挙げられていたことは、教会は揺るがぬ権威を持っているということでした。教会はそれぞれが持っている基準や価値観、これまで培ってきた慣習や文化といった何の権威もないものを土台として立っているではありませんでした。教会は神様から与えられたみことばの権威にその基盤を築いているのです。だからこそこのみことばに忠実に立つ時に、何が正しくて何が間違っているのか、だれが天の御国に受け入れられて、だれが受け入れられないのかを私たちは人々に大胆に伝えていくことができるのです。これが教会のあるべき姿、教会が建っている土台でした。教会が教会であり続けるために、主に喜ばれる教会として私たちが成長し続けていくために、何があってもこの土台を取り除いたり、また別のものに置き換えてはいけません。

○ 教会に託された使命

さて、きょう私たちがこの土台に続いて考えていきたいことは、タイトルにもあるように、“教会の使命”についてです。主はご自身の教会をどのように建て上げようとするのか、その青写真を示しただけではなく、ご自身の教会がこの地上にあってどのような働きをなして行くべきなのか、その使命についてもはっきりとみことばを通して教えられていました。そしてこの使命を私たちが正しく理解しているということは、ひとりひとりにとってとても大切なこととなります。なぜなら教会というのは確かな土台にさえ立っていれば、私たちの好きなように何をしてもよいわけではないからです。教会はキリストが望まれる土台の上に建て上げられ、キリストが望まれる目的を果たすものでないはいけません。だからもし同じ主を愛する者たちが集って主に仕えようとする時に、何のために教会が存在しているのか、主が何を教会に課しているのかを忘れてしまっているとすれば、たとえ数多くの働きをしたとしても、

それらは主の目的から外れた空しいものになってしまうことがあります。また、もし私たちが教会に与えられている使命を無視して、教会は自分の必要を満たすために存在していると考え始めてしまえば、この教会は自分の望みをかなえてくれない、あの人のやり方は気に食わない、自分の思いどおりに人が仕えてくれない、それなら自分も都合のいい時だけ奉仕しよう、自分をよりよく扱ってくれる教会が他にあるとすれば、そういった教会に移ろうなどと考えてしまったりするのです。もし私たちが仕えることよりも仕えられることを望み始めたら、その集まりは自己中心的なものになり、その教会は次第に死んでいってしまいます。ですから主に喜ばれる教会として私たちが成長していくことを望むのであれば、主が教会に与えた使命を正しく理解して、いつもそれに従ってすべての働きをなしていくことが求められるのです。

では、教会に与えられた使命、任務とは一体どのようなものなのでしょうか？そのことを考える上で、きょう私たちが見たいみことばはマタイ28：18－20になります。多くの皆さんもご存じのとおり、この箇所には大宣教命令と呼ばれる大切な命令が記されています。死からよみがえられた天に昇る前のイエス様をご自分の愛する弟子たちの前に現れて、ご自身が去った後、地上に残る彼らがなしていくべき重大な任務をここで託されています。そしてこの大命令こそがいつの時代にあっても変わることがないキリストによって贖われたすべてのクリスチャンたちと教会に与えられた使命になるのです。私たちが主に喜ばれる、何よりも主の栄光を現す教会として成長し続けていくためには、この大命令をみことばから正しく理解していることが不可欠です。そして正しく知っているのだとすれば、そのみことばに根ざして生きていく必要があります。問題はどれだけのことを知っているかではなく、それが生きたあかしとして私たちのうちに見られるかどうかです。

今の私たちは、主が私たちに託してくださっているこの大切な使命をしっかりと理解して、それにふさわしい歩みをしているのでしょうか？きょうはそのことをもう一度皆さんと吟味するために、マタイ28章に記されたイエス様のことばを見ていきましょう。特にきょうのテキストである18－20節のところでは、教会に託された使命に関して大きく三つの特徴を見ることができます。これからみことばを学んでいく中で、私たちに与えられたキリストの使命とは一体何かを正しく理解し、それを実践するような教会としてともに成長して行きましょう。

では、まずみことばをお読みしたいと思います。きょう私たちが見るのは18－20節ですが、16節からお読みしたいと思います。

マタイ28：16－20

「：16 しかし、十一人の弟子たちは、ガリラヤに行って、イエスの指示された山に登った。：17 そして、イエスにお会いしたとき、彼らは礼拝した。しかし、ある者は疑った。：18 イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。『わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。：19 それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、：20 また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。』」

1. 偉大な権威に支えられている使命 18節

さて、教会に託されている使命に関して、まず一つ目にイエス様のことばから見て取ることができることは、偉大な権威に支えられている使命だということです。主が教会に与えた大命令は確かな権威、もっと言えばイエス・キリストが持つておられる権威に基づいているものです。18節から「イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。『わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。：19 それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。』」と記されていました。復活され弟子たちの前に現れたイエス様はただ命令だけを彼らに与えたのではありませんでした。主は「これがあなた方が守り行うべき命令です、後は自分たちの知恵や能力に頼ってやりなさい」とは言わ

なかったのです。教会に託された使命には、まず何よりもそれを成すことができるという根拠が、その力が与えられていました。そしてそれこそがイエス・キリストが「天においても、地においても、いっさいの権威」を持っておられるということでした。ここに出てくる「権威」ということばは「自由に選ぶ権利」とか「自分の望むままに事を行ったり、ことばを発することができる力」といった意味を持ったものです。つまりイエス様は「天においても、地においても」、要するにすべての場所、すべてのことをご自分の意のままになすことができる力ある主権者だということです。確かにイエス様は十字架に架かって死なれた後、墓に葬られました。しかし、ご自身が約束されていたとおりに3日目によみがえられました。そしてその復活を通してご自身が死や罪に決して支配されることのない偉大な力を持った神、勝利者であることを明らかにされました。ピリピ2：9－11にもパウロは「それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、『イエス・キリストは主である。』と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」と言っています。私たちの主はすべてに勝る権威を持ったお方だ、この方はサタンに対しても、悪霊に対しても、地上の権力や国家また死に対してさえも勝る権威を持っておられる。この世界に起こるすべてのことにおいても、どの時代に起こることであっても、それがどれほど些細なことであったとしても、それらを思いのままに支配することができる力が主のうちにはあると教えています。私たちは普段生活している中で、私たちの目にはあたかも主が支配していないかのように見える場面に出くわすことがあるかもしれません。しかし、それは主が主権者でなくなったわけではなく、ただ私たちが主がなされようとしているご計画を理解できていないだけということです。私たちがわかっていないだけで、主はどんな時もすべてのことを支配しておられる。主はみことばを通して変わらずにはっきりとこう教えているのです。私には「天においても、地においても、いっさいの権威」が与えられている。私こそが主の主、王の王なのだ。教会の使命は、すべてこの権威に支えられているのです。

◎与えられた使命について覚えておくべき大切なこと

そして私たちの主がすべてを支配されている主権者であるのであれば、少なくとも二つのことを私たちはよく考えなければいけません。

①主権者のうちに使命を全うするための力と確信がある

一つは、この主権者のうちに私たちは任務を全うするための力と確信を見出すことができるということです。この後、私たちは主が教会に与えている大命令を19－20節の中で見ていくのですが、もし自分の力でそれをなしていかなければならなかったとすれば、余りにも要求されていることが難しく私たちが希望を失ってしまっていたことでしょう。自分にはできないことだと諦めてしまったかもしれません。しかし、すべてを支配しておられるそのお方が、私たちがみことばに従っていく助けも力も与えてくださる。私たちが覚えておくべき大切なことは、教会が教会としての使命を果たしていくことができるのは、私たちのうちにどんな場面にも対応できる知恵や力があるからでも、それをやり通すための強い意思があるからでもありません。ただ私たちの弱さのうちに働いてくださるこの主の力が偉大であるからこそ、私たちは主のために働いていくことができるのです。私たちの使命はそのような権威によって支えられている、それこそがパウロの言っていたことです。彼は「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」(ピリピ4：13)と言っていました。彼は自分に力があるからできるとは言いませんでした。

私たちが主のために働いていこうとする時、福音を熱心に伝えていこうとする時、確かにそこには難しさやチャレンジがあることはよく知っています。私のような口べたな者が語って、うまく伝えられずに失敗したらどうしよう、相手が自分のことばに耳を傾けてくれず自分を変な人だと思って拒絶されたらどうしよう、何度語ってもこの人は頑なに心を閉ざしてしまっていて、もう語っても仕方ないのかも

しれないと私たちは思うのです。私たちは人に対する恐れや心配を持つがゆえに、主のあかしを立てていこうとする時の妨げになったり、あきらめの思いへとつながってしまうことがあります。でも私たちは18節にあるように、主がすべての支配者だということを覚えることです。人には不可能に思えるようなことでも、この方においてはすべてのことが可能であり、主は私たちのような者でさえ用いて、すばらしいことをなしていくことができるのです。どんな時もこのような権威が支えてくださっているからこそ、私たちは何も恐れる必要がない。イエス様もヨハネ16:33で「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」と弟子たちを励ましていたことを皆さんも覚えておられるのではないかと思います。

②主権者のすべての命令に従う責任がある

また同時に、主権者が私たちに必要な助けや力を与えてくださるのであれば、二つ目に言えることは、主権者であられる方が私たちに命令を与えているのであれば、私たちはそれらすべてに従っていく責任があるということです。この世界のすべて、私たちの生活の何から何までも支配されている主が私たちに命令を与えています。主はそれをしたいかしたくないかと私たちに委ねているのでも、尋ねているのでもありませんし、選択肢の一つとして提案しているのでもありません。主が私たちに求めておられることは、へりくだって主が求めておられることに対して喜んで従うことです。そして主がともにいてくださるのであれば、私たちは自分にはできませんとか、自分にはあれが欠けています、これも必要ですというような言い訳をすることも、また今は忙しくて気分が乗らないからとか、今は別のことに追われているからと後回しにすることもできないということです。私たちを支えてくださっているのは、すべてに勝る権威を持った主です。この方が私たちに命令を与え、それをするための助けも備えてくださるとすれば、私たちに問われていることは主が命じておられることであれば何でもするという従順の心です。

2. 偉大な責任を伴う使命 19-20節

教会に託されている使命に関して二つ目に言えることは、この使命は偉大な責任を伴う使命だということです。イエス様は使命を支える権威について述べ、それゆえに19節から実際にどのような使命が教会に託されているのかを述べていました。19節「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。」、この箇所についてはたくさんのことを見ることができですが、まず注目してほしいことは、この「あらゆる国の人々を弟子としなさい」という命令です。今読んだ19-20節の中で動詞として用いられているのはこの「弟子としなさい」ということばだけです。あとの「行って」、「バプテスマを授け」、「彼らを教えなさい」ということばは、この「弟子としなさい」という命令を修飾している分詞として使われています。言い換えれば、ほかの三つのことばは弟子を作るということがどのようになされるのかを説明しているのです。

イエス様はここであらゆる国の人々を「弟子と」することを教会に対する大命令、大切な使命として与えていました。そもそもこの「弟子と」するということは一体何を意味しているのでしょうか？具体的に私たちが何をしていくことを主は求めておられるのでしょうか？この弟子を作るということに関しては人々の中にさまざまな考えがあります。ある人は弟子を作るというのは出て行って福音を語ることだと思われるかもしれません。まだ主を知らない人に救いのメッセージを伝えていくこと、伝道することこそが弟子訓練だと。またある人は弟子訓練というのは兄弟姉妹がともに時間をとって聖書のみことばを見ることだと考えているかもしれません。クラスを持ったり、家庭集会を持ったり、本や資料を通して学びをすることが弟子を作っていくことだと。もちろんこれらのことが間違っているわけではありませんし、どれも私たちにとって必要なものです。しかし実を言うと、これらはどちらも聖書が教えている

弟子訓練の一部であってすべてではありません。どちらもとても重要なものですが、単に伝道することや学びをすることだけが、弟子を作れという主の命令を果たしていることにはならないのです。

●弟子とは何か？

では、弟子訓練とは一体何を表しているのでしょうか？そのことを理解する上で大切になるのがそもそも弟子というのがどのような存在なのかということです。そのことを正しく理解することが私たちに問われています。この「弟子」ということばには先生や師の教えを学んで、その教えに従おうとする者といった意味があります。その学んだ教えに従って生きていこうとする者です。つまり弟子というのは単に師のことばを聞き、知識として蓄えるのではなく、そのことばを実際に生きていく人物だということです。この人物はみずからが尊敬する師と同じようになることを願い、その一挙一動に注意を払って、その生き方を見習おうとします。そして、その生き方に見習って行く結果、次第に師に似た者へと変えられていくのです。

イエス様も師と弟子との関係についてこのように言われていました。ルカ6:40「弟子は師以上には出られません。しかし十分訓練を受けた者はみな、自分の師ぐらいにはなるのです。」と。この弟子を作るということは単に伝道をしてイエス・キリストを生ける神の御子であると認めるようにと導くだけでなく、単に学びをして聖書の知識を身につけさせることだけでもなく、主を愛して主に喜んで従っていく者、この方に似た者へと変わっていきたいと人々が望んで生きていけるように彼らを導き続けることだということです。弟子訓練というのは、自分自身も師であるイエス様のようになることを望み、そしてほかの人も主に従って、この方に似た聖い者へと変わっていくことができるように助けを与え続けることです。この目的のために私たちは伝道をし、学びをします。私たちは弟子訓練をあらゆる国の人々に対して、例外なくすべての人に対して行っていきなさい、そんな責任を主から与えられています。

●弟子訓練とはどのようにして行われるのか？

私たちの行う弟子作りというものは一体どのようにしてなされていくべきなのかということに関して、先ほども言いましたけれども、イエス様は三つの分詞を用いて説明を加えていました。

1) 行く

まず一つ目は行くことでした。教会は人々がやって来るのをただ待つのではなく、みずから人々のところに出て行って弟子を作る必要があるのです。弟子を作るという行為は、受け身になって何かが起こることをじっと待っていることではありません。私たちは日々の生活の中であって、どんな時もみずからの生き方をもってキリストのあかしを立て、人々に福音を語り続けることが求められています。そしてこれには当然犠牲や覚悟といったものも伴います。私たちがキリストのあかし人として生きていこうとすれば、そこに難しさが伴います。私たちはそのことをよく知っているがゆえに、私たちの肉はこのように私たちに語りかけてくるのです。「出て行くのは大変だよ」、「人に拒まれるかもしれない」、「人と向き合うことには時間や労力もかかるからそんな大変なことを避ければ良い」、「出て行かなかつたらいい」と。時に私たちはこのような思いに負けて伝道しないことがあります。自分が苦しみたくないという思い、嫌な思いをしたくないといった思いが伝道できない理由をさまざまに私たちのうちに並び立てるのです。あの人との関係が悪化すれば自分は居心地が悪くなってしまいます。伝道が大切なことはよくわかっているけれども、今それよりもほかのことで手いっぱいだから、また別の機会にしよう。周りを見渡せば救いを必要としている人がたくさんいるにもかかわらず、こうして私たちはその事実にあふたをしてしまうのです。そして自分のことだけを求めて教会生活を送る、そんな生き方になってしまうのです。多くの場合、私たちが伝道しないのは伝道ができないからではなく、伝道をしたくないからだということです。私たちひとりひとりに問われていることは、どんな時も主に従って福音を伝え続けることです。

教会のある人たちは、この目的のためにまだ福音を聞いたことのない人がいる国へと出て行きます。宣教師として自分の一生をかけてキリストの素晴らしさを、主に遣わされる場所にあつて熱心に伝えて

いこうとするのです。私たちは教会としてそのような者たちのことを祈る必要があります。またある人たちは海外に出て行かなかったとしても、自分たちが置かれている場所にあつて福音を宣べ伝えていこうとするのです。それは職場や学校かもしれませんが、また自分の家族や友人かもしれませんが、近所に住む隣人に対するものかもしれません。それがどんな相手であろうとも、どんな場所であつたとしても、キリストを愛する者は皆遣わされた場所でみずから進んで弟子を作っていこうとするということです。

そして一つ確かなことは、私たちがそれぞれに置かれているその場所や状況というものは、主が特別にあなたをそこに置いておられるということです。皆さんこんなことを思ったことはないでしょうか？ どうして主はこんな状況に自分を置かれるのだろうか？なぜこんなに愛することが難しい人と私は毎日接しなければいけないのだろうか、環境が変わりさえすれば主のために働けるのにと。感謝なことは私たちはだれひとりとして偶然それぞれの場所に置かれているのではないということです。すべてを支配されている権威ある主が目的を持って今の状況にあなたを置いておられます。だからこそ私たちはどんな状況に置かれたとしても、すべての人に対して喜んでみずから進んで弟子を作っていく必要があるのです。

2) バプテスマを授ける

二つ目は、「バプテスマを授け」ということでした。教会を出て行って福音を語るだけではなく、その福音を受け入れて救われた者に対して、「父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け」ることが求められていました。もちろん私たちもよく知っているとおり、このバプテスマの行為自体には人に救いをもたらす力などいっさいありません。どんな行いであつたとしても人は救われることはないのです。しかし恵みによって、信仰によって、キリストによって救われた者はかつての生き方に対して自分が死んだということ、そして今はキリストとともに生きているのだ、新しい生き方になのだということを経験して公の場であかしをするのです。クリスチャンたちは初代教会の時代からずっとそのようにして主の命令に従ってきました。

弟子たちの上に約束どおりに聖霊が下って教会が誕生したあのペンテコステの日、ペテロはイスラエルの人々に対して大胆に福音を語っていました。そして彼のことばに心を打たれた人々に対して、このように彼は命じました。使徒2:37-38と41「人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、『兄弟たち。私たちはどうしたらよいのでしょうか。』』と言った。そこでペテロは彼らに答えた。『悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。……そこで、彼のことばを受け入れた者は、バプテスマを受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。』、文脈からもわかるように、人々は自分の罪が赦されるためにバプテスマを受けたのではなく、ペテロのことばに心を砕かれ罪を悔い改めたから、イエス・キリストを自分の救い主として受け入れたからバプテスマを受けていました。救われた者が一番最初に従う命令、それこそがバプテスマを受けるといふことなのです。そしてこの命令は今も変わっていません。今の教会にも同じ責任が与えられています。その者が福音を聞いて心から回心して救われたのであれば、バプテスマを授け、私たちは弟子を作っていくのです。

3) 教える

そして最後三つ目は「教え」ということでした。教会は出て行って福音を語り、救われた者にバプテスマを授けるだけでなく、主にあつて新しく歩みを始めた人々がますます信仰において成長していくことができるように教えていく必要があるのです。ここで大切なのは、教会はみことばをただ知識として伝えるのではなく、キリストが命じておられることを守るように教えるということです。主が求められていることはどれだけのことを知っているかではなく、知っていることをどれだけ実践しているかということです。ヨハネ14:15でもイエス様はここで使われている「守る」と同じことばを用いて「もしあなたがたがわたしを愛するならば、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」と言っていました。弟子を作

っていく時、私たちは彼らがますます主のみことばを愛して主が命じておられることをすべて守り行っていくようにと教え励まして行くのです。

私たちは自分たちの弟子を作り上げようとしているではありません。また私たちはただ知識を持っていても行動がいっさい伴わないような偽善者を作り上げようとしているのでもありません。だからこそ私たちは自分たちの考えや価値観を押し付けたり、知識だけを伝えようとはしないのです。教会というのは主を主とし、主のことばに喜んで従い続ける者を作り上げていく場所です。教会とは救われたすべての者が互いに責任を負い合って、重荷を負い合って、ますますキリストに似た者へと変わっていくことができるように、学んだみことばに従って生きていくことができるように教える場所です。この働きは天に召されるまで続きます。私たちが伝道して教会に連れて来て、後は好き勝手にやってということではなく、伝道してバプテスマを授け、その人を教え続けるのです。自分がキリストに似た者になっていこうとするのと同じように、主に似た者として変われるように人々を教え続けていくのです。

私たちがこういったことを実践すれば、教会がどのような姿になっていくのか想像できますよね？その教会は皆がキリストに似た者へと変わっていくことを望んでいるがゆえに、師であるキリストの姿がそのうちにはっきりと示されるようになっていくのです。では皆さん、私たちの教会を人々が見た時に、人々は私たちのうちにキリストの姿を見るのでしょうか？たとえどんな働きをしていたとしても、数多くのプログラムをしていたとしても、人々が集まって交わりをしていたとしても、もし私たちのうちにいっさいそれが見られないのだとすれば、私たちに問われていることは主が与えた目的に沿って私たちは今歩んでいるのかどうかということです。教会は私たちのためにあるではありません。主のためにあるのです。私たちはこの主の使命を忠実に果たしているのでしょうか？それとも自分の必要を満たすことを何よりも望んで教会生活を生きているのでしょうか？教会というのは福音をみずから進んで宣べ伝え、救われた者にバプテスマを授け、そしてその者がますます主に似た者として主のみことばを愛して従う者へと変えられていくように、それを助け教え続けていく。これが教会に託されている使命、弟子を作るという重大な責任になるのです。

3. 偉大な約束に守られている使命 20b節

そして最後に、教会に託されている使命に関して三つ目に言えることは、偉大な約束に守られている使命だということです。イエス様は教会に対する大きな責任について19-20節で述べた後、20節を「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」と終えられました。この箇所の手紙をそのまま訳すと、「私自身が世の終わりまでいつもあなたがたとともにいます」となります。つまり地上を去って天に昇ろうとされていた主は、最後に弟子たちとともにおられる方がだれなのかを強調しようとしたのです。弟子たちよ、世の終わりまであなたがたとともにいるのはほかのだれでもない、私があるあなたがたとともにいると。すべての権威を持った主権者、すべてを思いのままになすことができる王の王、イエス・キリストが再び地上に帰って来られるその日までいつも離れず私たちとともにいてくださると約束してくれているのです。思い返せば、このマタイの福音書も、この主はインマヌエル——私たちとともにいてくださる方としてこの地上に来られたことを記していました。そして、私たちが本来受けるべき罪の罰を代わりに受けて十字架にかかって死んでくださったのです。それだけではなく死の力を打ち破り、墓からよみがえられました。この方が私とともにいてくださる。私たちはこんな約束によって今守られているのです。

ローマ8:31-35、39でパウロもこのように言っていました。「では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょ。神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエス

が、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしてくださるのです。私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。8:36 『あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。』と書いてあるとおりです。しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」と。

主が教会に託された使命、私たちがこの地上で果たして行くべき任務は確かに簡単なものではありません。私たちは多くの場面で難しさを覚えたり失敗してしまうことがあります。それはこれまでもありましたし、またこれから先も必ずあります。主の働きに忠実であろうとすれば、そこには戦いや迫害というものにも必ず直面するでしょう。しかし、たとえ私たちがどんな困難に遭ったとしても、どんな状況に置かれることがあったとしても、私たちはひとりではない。主が私たちとともにいてくださる。私たちの慰めはこの世の中にも、また自分たちの内にもありません。私たちの慰めは私たちを愛し罪から救い出してくださった方、生ける神の御子キリストのうちにのみあるのです。そしてこのような偉大な方がともにいてくださるからこそ、私たちは主が託してくださった使命を最後まで全うしていくことができます。このようなすばらしい約束が与えられているからこそ、守られているからこそ、私たちはキリストが教会に与えた任務に対して熱心に、また忠実に取り組んでいくことが求められているのです。

〇まとめ

さて今朝、私たちは教会のあるべき姿、教会に託された使命について見てきました。私たちの教会は正しい土台の上に立ち、主が望まれている目的にかなった歩みをしているのでしょうか？私たちは主が託してくださったように、みずから進んで人々のもとに出て行って福音を語り、また救われた者に対してはバプテスマを授け、彼らが成長していくことに必要なものを喜んで与え続けているのでしょうか？私たちの教会は互いの間で弟子を作ることを今も変わらず実践し続けているのでしょうか？主は私たちひとりひとりに弟子を作るという大命令をお与えになりました。すべてを支配されている権威あるお方がそのことを行っていくようにと私たちに求めておられるのです。もし私たちのうちに伝道に対する思いが欠けているのだとすれば、この命令に対する思いが欠けているのだとしたら、その時はキリストの愛と犠牲を覚えることです。かつての私たちがどのような運命にあったのかをいつも覚えていることです。私たちは生まれながらに聖く正しいこの神に逆らい、この方の忌み嫌われることを望んでするような罪人であったがゆえに、地獄で永遠のさばきを受けるべきただそれだけの存在でした。しかしそんな私たちのために神の子であるキリスト・イエスが十字架にかかって、死と復活のわざによって私たちを贖い、神の家族へと迎え入れてくださったのです。この方が私たちを愛してくださっているからこそ、今私たちは希望を持って生きて行くことができます。

でも私たちが周りを見渡せば、主を知らない者が数多くいます。そんな者であふれています。唯一私たちだけが彼らを助けることができる命の福音を持っています。だとすれば、私たちはこの地上に置かれている間出て行って主のすばらしさを伝え続けることです。もし私たちが自分のことだけを考えて、救われた自分はあとは好きなように生きていけばいいとことばでは言っていなかったとしても、歩みがそれを証明しているのであれば、私たちは悔い改めなければいけません。私たち教会がこの地上に置かれている使命を思い出し続けることです。そして主はそんな私たちといつも一緒にいて必要な助けも力も与えてくださる。教会として主の託してくださった使命を最後まで全うし、ますます主を愛し従うそんな群れとして成長し続けていきましょう。